

【巻頭論文】

人や家族の尊厳－Cubical Perspective Approach

福山 和女*

はじめに

人や家族を援助・支援するとき、人を尊重すること、人の尊厳を守ることの必要性や原則は、ごく当たり前のこととして、対人援助の専門職の間で語られ、マニュアルやハンドブック、テキストなどには必ず解説されている事柄である。しかし、人の尊厳を保つことについての解説は一、二行程度の文章で、個人の人格を尊厳することというような実に簡単な記述であり、対人援助での具体的な実践方法についてはあまり述べられていない。実際に人の尊厳を保つような姿勢であるかどうかについては他者から見て捉えにくいものである。本稿では、どちらかといえば専門職の姿勢として取り扱われている人の理解や尊重について、実践方法と関係づけて検討してみたい。

国際会議でのテーマ

時代と共に、多くの援助方法論やアプローチが開発され、ソーシャルワーク実践現場に適用されてきているが、その適用の仕方は専門職間で、また国家間でさまざまである。ソーシャルワークの定義すら国によってさまざまであり、国際定義が採択されたのもつい最近のことである。2004年10月にオーストラリアのアデレードで IFSW 国際会議が開催された。

本会議では 110 カ国からソーシャルワーカーが集まり、活発な意見交換をした。演題の中にグローバリゼーションの概念が多く取り上げられていた。以下にその内容をまとめる。

- 1) グローバリゼーションの概念は、多くの異なる意味を含んでおり、それぞれ異なる解釈がなされる。グローバリゼーションの概念は、多くのプロセスと社会的諸側面から構成されている。グローバリゼーションという言葉の概念は、社会福祉教育では十分に検討されてこなかったこともあり、それほど教育とのつながりを持たせてこなかった。その意味で、社会福祉教育をグローバル化して、アジアへ導入して欲しいというリクエストがシンガポールの政府や民間団体からあった。社会福祉やソーシャルワークの教育がグローバリゼーションの概念を使ってどのように展開できるかについて検討されていた。特に、アジアの国々への **Transporting Social Work Education** という表現が使われていたのは興味深い点である。
- 2) グローバリゼーションの領域はさまざまな方法論や視点から論議されてきたが、ソーシャルワーク実践に見るグローバリゼーションの意義が問われている。
- 3) グローバリゼーションの効果および倫理：資本主義と社会福祉、社会価値とグローバルな価値への切り替え、ソーシャルワークの価値（国際的知識基盤の価値をも含む）、グローバル的正義について検討されていた。
- 4) 国際関係とグローバリゼーション化の影響

【*ルーテル学院大学】

グローバル化された世界での地域の考え方や人々の力の発展、産業の発展途上国と先進国の間では、価値の見方に精密な意味での差異がある。グローバリゼーションの現象は21世紀のソーシャルワーク実践に意味深い影響を与える。この半世紀、世界的に、政府サイドによるネオリベラル経済政策が経済的、文化的、政策的変革の広範囲なプロセスの主要素として追求されてきたが、これがグローバリゼーションといわれてきた。国や地域の進化の道を形作ってきたグローバルな、経済的、社会・文化的力について考えると、グローバリゼーションは必ずしも新しい現象ではない（Globalization is not necessarily a new phenomenon）と述べられていた。

- 5) 災害被害者に対するグローバリゼーションとソーシャルワーク、グローバリゼーションの時代における HIV/AIDS 疾病に悩む女性や子どもの人権擁護の市民団体の役割が問われていた。
- 6) グローバリゼーション、市民団体、ソーシャルワークとの関係
- 7) ソーシャルワークと持続性ローカルな課題とグローバルな課題
- 8) グローバルな領域での認可されたサービス

人々のグローバルな力と協働的グローバリゼーションという観点から捉え、国の発展に与えるグローバリゼーションの影響と国内への導入実践例が発表されていた。韓国、オーストラリア、アフリカなど、グローバリゼーションは地域社会に対しては相反する影響を与えてきたことを報告していた。地域社会を衰退へと導く一方で、経済的発展のための新しい機会を与えたこと。これまで、人間社会の発展や生き残りを支援してきた多くの第一次的な資源が今や破壊されつつあること。南アフリカでは経済的グローバリゼーションの歪んだ力がヘルスケアの資源不足の慢性化をもたらし、グローバルな政策や人々の意思の欠如に反映していること等具体的発表があった。

本会議ではグローバリゼーションをソーシャルワーク実践と関連させて論じるようなテーマが中心となり、さまざまな角度から検討されていた。特に、人と人が異なるのではなく、平等、対等が重視されていた。これは、人と人が限りなく同質に近づくことになる危険性を示唆していると考えられる。

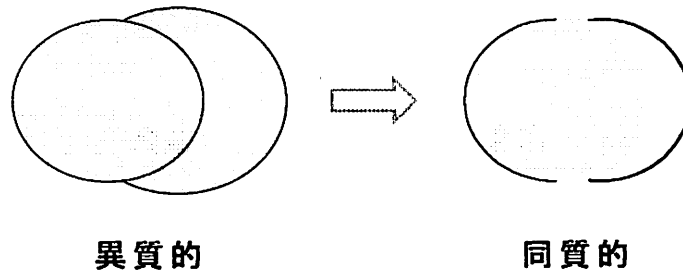
このアジア・太平洋地区プレ会議で、「Understanding Families in a Cubical- Perspective Approach」と題したワークショップを筆者が企画し、對馬節子氏（文京学院大学）、荻野ひろみ氏（荻野クリニックのソーシャルワーカー）、萬歳美美子氏（小児療育相談センターのソーシャルワーカー）とともに開催した。このワークショップでの主テーマは、人の尊厳を保つことの具体的な実践方法であり、社会福祉援助技術の方法論の歴史的変遷を辿りながら、人の尊厳を保つことのプロセスを実体験から体得することを目的とした。そのワークショップ内容に基づき本稿では再度人の尊厳について考察する。

ここで、ソーシャルワークの概念を考える。対人援助の分野では人が他の人と異なる部分を問題と捉え、その部分を削除することが問題を解決することであると考えられていた時代がある。この考えに基づくならば、人や家族を援助することはこの相異の部分を解決して除去することであると捉えることができる。しかし、現在ではこの相異の部分がその人の持つ独自性・個性性であると考え、人や家族を支援することはこの相異を大切にすることであると捉える。

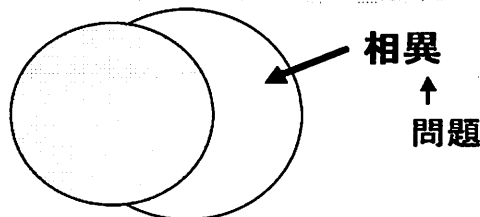
人の存在・尊厳

個別性
独自性

グローバリゼーション



ソーシャルワークの概念



人や家族を援助すること

= 相異を解決すること

人や家族を支援すること

= 相異を大切にすること

この相異について人の知覚から検討する。人と対面するときどのように相手を知覚するのかについて考えてみたい。近世哲学者のヒュームによると、知覚は印象と観念の2種類からなる。印象は、とても強い力や激しく活力を感じとれたものである。感覚的なものであり、情熱や情緒で捉える。これを身体的、物理的、環境的なもので感じることになる。また観念は、とてもかすかな力とよわよわしい活力を感じたものであり、それを思考することや推測すること、心像で捉えることである。ひとは観念的に知覚するとき、記憶から呼び起こし、また想像による予測から感じる。この印象と観念を活用して人は相手との相異を感じとる。これを知覚という。

この知覚から、人の理解をする場合についてもう少し詳しく考えてみる。対人援助をするとき相手からまたは家族からさまざまな情報を得る。すなわちさまざまな情報を知覚する。

ここで、情報について少し見ておきたい。『広辞苑』(2003)によると、情報とは、判断を下したり、行動を起こしたりするために必要な種々の媒体を介しての知識であるとされ、状況、人、出来事を

伝達する事実、こまごまとした事実が含まれている。一方、情報科学とは情報の性質・構造・論理について生成・伝達・変換・認識・利用などの観点から探求することである。では、社会福祉の専門職は対人援助の際に本人や家族から多種多様な情報を得ているが、それらの収集した情報をどのように人の理解に活用しているのだろうか。

知覚	
印象	観念
強い活力	かすかな力
激しい活力	弱々しい活力
感覚 情熱 情緒	思考すること 推測すること 心象
感覚と対象 身体的, 物理的 環境の中で	感覚と対象 記憶からの呼び起こし 想像による予測

* 依田義右 (2004), ヒューム、D 『近世人間中心思想史ーデカルトからヘーゲルへの路』, 晃洋書房, PP.203-206

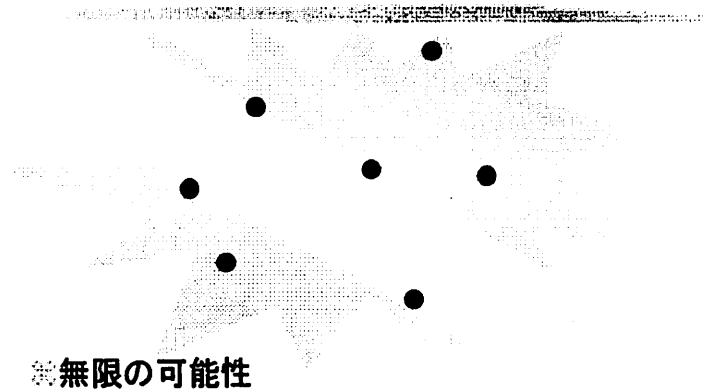
情報の知覚について、点としての知覚、点と線としての知覚、点と線と面としての知覚および面としての知覚の4つの段階に分けて、事例を用いて提示する。

第一段階：点の情報

夫：死亡，妻：65 歳，腰痛，息子：40 歳という7つの情報を入手した。これに基づき、誰が何の問題で困っているのかについて想定する。この7つの情報に基づき想定した内容は人によってそれぞれ異なる。つまり、これらの7つの情報は、個々に完結型のものであり、他と結び付けて考える必要がない。

つまり、それぞれの情報が点在しており、点と点の間は自由に潜り抜けることができる。結果的には、想定内容には無限の可能性がある（図参照）。ということであり、人を点の集合体として捉えることになる。本人や家族の理解はこれらのどの点の情報が印象に残るかによって異なってくる。その意味では、人の重みやかさを感ぜない。この人が抱えている問題についても輪郭がはっきりしない。この段階で人の理解をする方法論が使われていた時期があった。言い換えれば、これ以上の情報を得ないで援助を実施していたのであり、特に制度の受給資格があるかないかだけを判断して措置していた時である。

第1段階: 点情報の活用



次に、別のレベルの情報、すなわち線レベルの情報を付け加えると次第に問題が見えてくると考える。

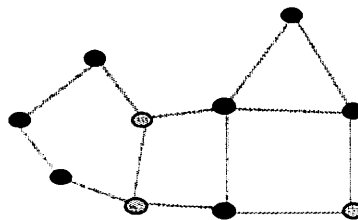
第二段階: 点と線との情報

夫: 死亡, 10 年前

妻: 65 歳, 腰痛, 激しい痛みをともなう四つんばいの状況

息子: 40 歳, IQ 40

第2段階: 点・線情報を活用



この段階では本人や家族の理解は十分でない。問題の輪郭を大まかに捉えることは可能になった。つまり、点在していたそれぞれの情報について、関係性を含む情報でつなぎ合わせる。線で結ぶことで、それぞれの情報がつながりを持つようになる。

つまり、点としての情報に、関係性を意味する情報を付け加えることで、この図のようにその人の抱える問題の全体像と概要が少し把握できる。その意味では、人を少し理解できたように感じる。これは、人間関係論を主として援助していた頃であり、よく、子供のしつけが悪いのは母子関係が

悪いからであると判断していた頃である。

次に、この本人や家族を取り巻く状況についての情報を付け加えてみよう。すなわち、点と線の情報に、面の情報を加えることになる。

状況：

この母親は、腰痛があり、とても痛く、四つんばいのようにして這うことしかできない。病院のリハビリテーションを受けるために通院している。通院の介助は息子が行なっている。息子は、体格的には屈強で頼もしい。リハビリテーションの看護師さんがこの親子のことを良く知っており、息子の事情も良く知っているの、なんとか手助けをしてあげたいと考え、お母さんが65歳なので介護保険が利用できることを、お母さんに伝え、お母さんもその情報についてよく知っており、とても賢い人なので、「それもひとつの方法ですのでお願いしたい」といった。

そこで、居宅介護支援事業所に連絡を入れ、ケアマネジャーが家庭訪問をした。ケアマネジャーが電話連絡しておき、玄関から入ると、家の中がとても整理整頓されていた。お母さんは、痛そうに眉を潜め床に伏せていた。ケアマネジャーが介護支援について説明をして、書類を見せ、申請が可能であること、ヘルパーを週3回ほど利用できること、そのことで息子さんの自由な時間ができて介護負担軽減が図れることを説明した。

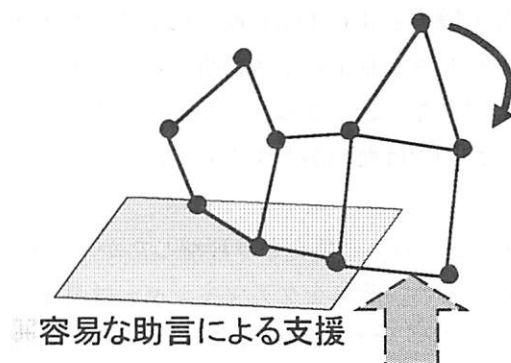
お母さんは、丁寧に礼を言い、息子が知的障害で、IQ 40であること、今年前中は作業所で働き、午後から帰ってきて母親の介護をしてきていることを話した。息子の意向も聞いてほしい。息子は家族の一員であるのと付け加えた。午後からは家にいるのでとの母親の依頼に、ケアマネジャーは午後の再訪問を約束した。

午後2時に行くと息子が母親の指示を得ながらいがいしく母親の世話をしていた。お母さんは、息子に向かってさっき話していたケアマネジャーさんよと息子にいった。息子とケアマネジャーが話しているのを母親は床に伏して見ていた。ケアマネジャーは、午前中の母親への説明と同じように書類を見せながら息子に説明した。「それでいかがでしょうか。おかあさんが介護保険を使われるといいと思うのですが」と云った。息子は、頭を傾げて、「うんいいかも」といった。ケアマネジャーは「そうですか、あなたも同意してくださるのですね。ではお母さん、申請書を作りましょうか」といった。

母親は、床に伏せていたのに、急に、起き上がり、布団の上で座った。痛みで眉をひそめていたのがなくなっている。そして、「ケアマネジャーさん、とても不思議なことが起こりました。まったく痛みがなくなりました。この分だと私たちだけでやっていけそうですので、公のサービスは使いたくありません。ご足労かけて申し訳ありません。今回はお断りしたいと思います。」と母親が言った。ケアマネジャーは「分かりました。もし今後必要でしたら、どうぞご連絡ください」と言って帰っていった。

事業所に戻ったケアマネジャーは上司に報告した。「今日訪問した家族は、多問題家族で、息子さんも知的障害です。困難事例ですね。なんか、公のサービスは受けたくないとおっしゃったのです。もしかして福祉のサービスを受けて、いやな思いをされたのではないですか。」と。

第3段階: 点・線・断面情報の活用



これは、現状を話したので、断面を示したことになる。となれば、この親子の抱えている問題が今どのような状況下にあるか、危ない状況であることが十分読み取れる。援助者はなんとか支えてあげなければならないと感じ、この図の矢印のように大きな支えを提供しようとする。大体このような危機の状況に直面すると、なんとか援助しなければという気持ちが強く、問題が見えているので援助者は容易に助言しようとする。その助言の内容は、利用者もありがたいと思うものである。ところが、その後しばらく冷静に考えてみるとそんなに過剰に援助を必要としていないことに利用者が気づくようになる。この段階でしばしば発生するのが、利用者の要望や要求が急に変更されることである。これは、危機介入の理論を使って援助するときに生じる。

それでは、援助が妥当であったとするのは、どのような支えなのだろうか。現場では過剰でなく、過小でなく、的確な援助が求められている。社会資源の限りのある現状では、この点は重要である。もっと人が抱えている問題を包括的に理解することができればよいのだろうか。いま一度、包括的、立体的理解を試みよう。次の6つの項目を考える。

立体的理解へのガイドライン

- * 知的障害は後天的ですか？
- * 息子が、「うん、いいかも」と云った言葉をどのように解しますか？
- * 家の中が整理整頓されていたことをどのように解しますか？
- * 息子への説明方法の妥当性
- * 男性で40歳のイメージは何か。
- * 息子は自由な時間が持てるだろうからと考えたことの根拠は何か？

まず、知的障害をどのように理解したのか。後天性のものと捉えているのか。つまり、最近の事故で負傷して、高次脳機能障害になり、知的レベルが低下したのだろうか。知的障害は、先天性のものと決め付けているが、実は先天性であることの理解を本当にしたのだろうか。つまり、先天性であるということは、この親子が知的障害と40年間も取り組んできた専門家であるということ。知的障害に対する社会福祉制度やサービスを息子が小さい頃からずっと利用してきたことや今もなお作業所に通っているので、利用者であること。このことから考えると、ケアマネジャーがというような福祉のサービスで嫌な思いをしたのではないかとする考えは妥当ではない。

次に、息子の「うん、いいかも」と云った言葉をどう理解したか。これは、「あなたの言うことは難しくて分からない」と云ったのだろう。それをケアマネジャーは息子の意志で同意をしたと捉えている。母親は、息子が社会人としてケアマネジャーに対応できるかと期待していたが、やはりだめであったことを認めた。息子は午前中作業所で働き、社会人として役割を果たし、午後から息子として母親の世話をすることで自分の役割を果たしている。ここでヘルパーに依頼することでこの息子の役割を奪うことはできない。母親自身がこの子の役割を認めることの必要性を十分に知っている。母親は、息子の言動についてはよく理解しており、どのような気持ちでいるかを言動から即座に読み取った。

第三に、家の中が整理整頓されていたこの事実をどのように理解するか。これは、知的障害をもつ息子が安定して生活するための対策のひとつに、物事の順序をいつも一定にしておかねばならないことが挙げられる。だからこそ、整頓されていたのであり、このように40年間生活するなかで母親がしつけてきた結果なのである。そのしつけは、それほど簡単ではなく、それぞれの行動を一つ一つ指示を出して息子に行なわせることをこの母親が実行してきたことなどが考えられる。

息子への介護保険の説明は妥当であったか。ケアマネジャーは一度、事業所に戻っているのに、息子が知的障害であることを知ったなら、母親に対してと同じ説明をすることは妥当ではなかった。どのような説明なら理解が可能かを考え、その工夫が必要であった。難しい書類の漢字が読めないことぐらいは想定をして誰か専門家からコンサルテーションを受けておくか、あるいは母親がベテランであるため母親からのアドバイスを得ることが必要であろう。

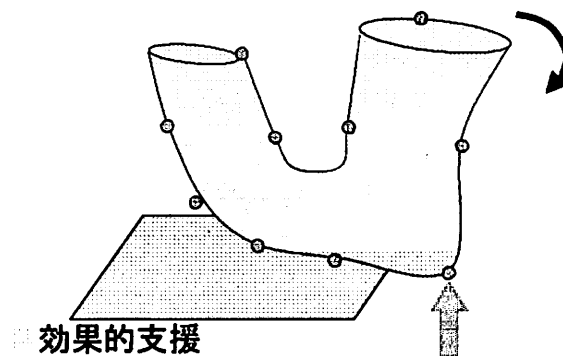
男性40歳というイメージはどのようなものか。社会では、40歳男性といえば、必ず働き盛りと考え、働けない人に対する偏見は根強いと考える。現在、知的障害者の施設や機関で自立支援が重視され、就労支援をすることが求められている。会社や企業の人々はこの息子に対して理想をあてがってしまい、実際の彼の實力との差があまりにもあるため、彼を理解できないまま継続勤務を断ることが多い。このような経験をこの息子がしているのである。

ヘルパーを利用すれば、息子の自由な時間ができるとケアマネジャーが考えたこと。つまり、知的障害の人にとって、自分の立場を確保でき、自分の役割を遂行できることのほうが大切であるかもしれない。自由な時間の使い道がどのようなものなのか、ヘルパーが彼の役割を奪ってしまうことで、彼の働き場がなくなることの意味を考えておく必要がある。

この親子に対してこのように理解するならば、この親子が生きてきた過程や努力、取り組み行動などがよく見えてくる。この親子の実態が立体的に掴めることになる。

このように立体的に理解することで、その人の価値も把握でき、その意味では、どこを支えればよいか、支点が明確になり、支える量も過小、過剰にならず、的確な効果的な支援が可能になると考える。

第4段階: 立体的視点の活用



人の6側面

- 1 心理的側面
- 2 精神的側面
- 3 物理的・物質的・環境的側面
- 4 社会的側面
- 5 身体的側面
- 6 靈的側面

以上、人の理解は、人の尊厳の保持、人の尊重につながるもので、人を立体的に捉えることについて段階を追って検討した。人は、6側面を有している。この表のように、心理的、精神的、社会的、身体的、物理的・環境的、靈的な情報を収集することの必要性を理解し、援助するならば、人の尊厳を保ちつつその人の重みやかさを感じ取れるようになると思う。これら6側面は、側面として存在しているものではなく、それぞれが緻密にしかも複雑に人の奥深くから組み込まれたものである。だからこそ、人を立体的に理解するには、その人なりの、その家族なりの組み込まれている実体、これを独自性というならば尊重することが必要なのである。人や家族をみて、キラリと光るものが、点、線、面、であるかもしれないが、それをどのように組み込んでいるかをじっくりと理解することこそ、人の尊厳を保持することになる。

結 論

人の存在を尊重することは、重要である。

人や家族を立体的アプローチによって理解することは、人や家族が直面している現実と効果的に取り組むことを可能にする。

これが、エンパワメントの真に意味するところである。

人の理解は、人の価値を尊重することであり、その人の個別性や独自性を尊重することであることは十分意識しているが、現に援助者の目の前に本人や家族が座し、さまざまな情報を語られていく中で、私たちは本人や家族を「現実の人」として捉えるのではなく「あるべき姿」「望まれるべき姿」として捉えるようになっていく。立体的に捉えることで、私たちはその人の重みを十分感じ取ることができることを実感した。グローバリゼーションの概念についてもソーシャルワーク実践と結びつけた捉え方をすることで、十分に活用でき、よき成果を出すことができるであろう。